

<b>事例項目</b>	<b>02 個に関する指導</b> 06 ケース会議
<b>概要</b>	<b>授業中にこちらの指示や説明が理解できているのか不安がある生徒への相談</b>
<b>事例提供校</b>	高校： 西部地区 全日制 特支： 掛川特別支援学校

<b>事例の内容</b>	<b>高校からのリクエスト</b>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 提出物や課題が出せない、何をしてもテンポが遅い、授業中の居眠り、取り掛かりに時間がかかる、機械などへすぐに手がでるため危険、時々泣いて言い訳にくる等の生徒に対して、授業を参観し、実際に本人の様子を見て助言が欲しいです。</li> </ul>
<b>事例の内容</b>	<b>特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）</b>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1回目 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高等学校訪問、当該生徒の授業観察をしました。</li> <li>・ 主訴の聞き取り及びそれに対する個の捉え方や改善策の提案をしました。（副校長、担任、その他の関係教職員全6人参加）</li> </ul> </li> <li>・ 2回目 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高校等学校訪問、当該生徒の参観つまずきの拾い出しと評価をしました。</li> <li>・ 授業者への質問とつまずきの評価と解説、改善策の提案をしました。</li> <li>・ 願いの引き出しとその共通理解への介入及び組織化への提案をしました。（副校長、担任、その他の関係教職員全6人参加）</li> </ul> </li> </ul>

<b>センター的機能を活用した感想</b>	<b>高校 担当者のコメント</b>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 助言を受けて授業内の困り感がかなり減少しました。上手くいっている点の確認をしました。少人数や興味のある科目を少しずつ区切ってやらせるようにしました。（レポートは1日1枚ずつ実施）家庭で学習をするのではなく授業や放課後の学校の時間内でできる範囲で課題をやらせました。時間を短く区切って達成感や成就感を味あわせることが有効でした。</li> </ul>
<b>センター的機能を活用した感想</b>	<b>特別支援学校 担当者のコメント</b>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手立てで評価できる面を引き出しました。放課後残る習慣がついているのでその時を利用して指導しました。教師が指示するときは、その場でノートに記入させました。課題を他の生徒より早めに出す等の手立てを立てたことで生徒の変容が見られました。まずは、教師の見方や捉え方を変えることが大切です。</li> </ul>

<b>まとめ</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教師自身の困り事を明確にすること、その困り事を声にあげることによって「困り事を共有できる教師チーム」ができました。「困り事を共有するとチーム」と「改善できるプロジェクトチーム」を立ち上げました。</li> <li>・ 「改善できるプロジェクトチーム」で「つまずきの追究・分析の方法」「分析を手だてにする方法」「手立てを具体的に実践する方法」等を具体的に明示しながら現場介入する必要性があります。</li> <li>・ 「改善できるプロジェクトチーム」が実践した評価に「それでいいんだ。」等の後押し評価をすることが高等学校での特別支援教育現場には必要だと思いました。</li> </ul>	

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。